

## カルヴァンの三位一体論

——『キリスト教綱要』を中心として——

宮平 望

### はじめに

古代キリスト教会において父、子、聖霊なる神は、「三位一体(Trinitas)」、すなわち、「三つの位格、一つの実体(tres personae, una substantia)」という定式が与えられた。これを宗教改革者たちは継承したのだが、カルヴァンはどう理解したのだろうか。

本論では『キリスト教綱要』を中心として、カルヴァンの三位一体論<sup>1)</sup>を、彼の神認識論、自己認識論<sup>2)</sup>についての見解と併せて考察する。

### I. 『キリスト教綱要初版』における三位一体論<sup>1)</sup>

カルヴァンは、父、子、聖霊の三位一体とは、どういうことなのかを使徒信条講解で述べる前に、まずはそれを信じる信仰について定義する。

信仰には二つの形があり、「神とキリストが存在する(esse)ことを信じるだけ」の信仰と、それだけではなく「神が私たちの神であること、キリストが救い主であることを知って神とキリストを信じる信仰<sup>2)</sup>」である。彼は、前者のような信仰を非難し、後者のような信仰こそ真の信仰だと言う。そして、パウロの言葉を解釈して、その真の信仰について述べる。

「究極的にキリスト教の信仰と呼ばれ得るこの真の信仰は、神の真実は確かなものであって、神がその聖なる言葉によって実行すると約束したことは、必ず成就する(ローマ10章 [11節])ということを確認する、心の確信に他ならない。パウロはこのことを次のように定義して教えている(ヘブル11章

〔1 節〕)。すなわち彼は信仰を、望んでいる事柄が確かにあること (substantia) と呼び、現れていないことの確証と呼んでいる。サブスタンティアもしくはギリシア語のヒュポスタシス (hypostasis) という語でパウロが意味しているのは、私たちがそれにより頼み、支えられている支え (fulcrum) といったもので、あたかもこう言っている如くである。「信仰とは、神が私たちに約束した事柄を確實堅固に所有すること (possessio) だ<sup>3)</sup>と」。更にカルヴァンは、「信仰とは望んではいらぬが見てはいないことどもを所有する (possideo) ことを確信することだ<sup>4)</sup>」と付け加える。

このように彼は、信仰を望んでいる事柄、見えていないものの「substantia」と言い、それを「所有」という概念と結び付ける。従って、真の信仰は、神やキリストの「存在」を信じるだけという静的な信仰ではなく、神によって約束された事柄を「所有」するという動的な意味における信仰である。

こうした意味における「substantia」を用いてカルヴァンは、三位一体を、「『一』という言葉が私たちが聞くとき、実体 (substantia) の一致 (unitas) と理解すべきであり、『三』という言葉が聞くときは、この一つの本質 (essentia) の中に三つの固有性 (proprietas) の区別があると解すべきである。」<sup>5)</sup>と定義した。

この「一」なる神の根拠を示すためにカルヴァンは、申命記 6 章 4 節<sup>6)</sup>の他に「パウロは、神と信仰と洗礼とを互いが互いの論拠になるように結びつけた (エペソ 4 章 [5 節])<sup>7)</sup>」という事実を挙げる。洗礼が一つであるように、信仰も一つであるが、そのどちらも唯一の神に属しているのである。だから神は唯一であると論じたのである。

そして、「三」ということについて彼は、「聖書はこれら三つを区別して、父にはわざの初めと、万物の源泉を帰し、子にはわざの知恵と計画を帰し、<sup>8)</sup>聖霊には行いの効力と効果を帰している」と、それぞれの独自の働きがあることに触れて、使徒信条講解に入る。

第一部から第三部までで、それぞれ父、子、聖霊が論じられるが、父に関しては全能の創造者ということについて触れ、聖霊に関してはそのわざ、力について触れるだけである。紙面は専ら子なるキリストについて割かれる。

神の存在を信じるだけではなく、神の約束された事柄を所有する、という実践的な信仰の態度は、主にキリストに対する態度として詳述される。

キリストと私たちの関係について述べる際、カルヴァンは、「固有性の交流 (communicatio proprietatum)」、ないし「特性の交流 (communicatio idiomatum)<sup>9)</sup>」という用語を用いて解説する。

「固有性の交流」が意味するのは、キリストが、「私たちに固有であったもの (quod nobis proprium erat) を、自分と関係がある (pertineo) ようにし、自らに固有であったもの (quod sibi proprium erat) を、私たちと関係があるようにして、かくして自身を私たちと共通するもの (commune) とし、神の子であって、人の子としたのである<sup>10)</sup>」、ということである。これは、「パウロが『神はその血によって教会を贖い取った』、また『栄光の主が十字架にかけられた』 (使徒20章 [28節]、第一コリント2章 [8節]) といったことに存するのである。…真に神にして真に人なるキリストが、十字架にかけられて、自身の血を私たちのために流したので、その人間性において行われたことは神性に移されたのである<sup>11)</sup>」。従って、「ひとりキリストの位格の中に二つの本性の固有性 (naturae proprietates) が見られる…<sup>12)</sup>」と言い得る。

ここで「固有」という語は、二通りの意味で用いられている。キリストと人間を区別して、キリストに固有であるということと、人間に固有であるということを一方で表し、他方、キリストの中に神性と人性の二つの固有性がある、ということを表している。そして、こういうキリストの二つの固有性に基づいて、人間に固有なものとキリストに固有なものが交流する、とカルヴァンは説くのである。

しかし、このことは決して抽象論で終わらない。教会において、それは聖礼典なる主の晩餐において具体化させられる。ここで第四章の聖礼典を扱っているところを見ておく。

神の真理はそれ自身で確実なものであるが、「外的象徴によって私たちに言明される神の恩寵の証し<sup>13)</sup>」として私たちの信仰の弱さを支えるために与えられた。

主の晩餐においては、カルヴァンは「交換 (commutatio)<sup>14)</sup>」という語を用い

て説明する。キリストが私たちのためにした交換とは、「私たちの貧しさを彼の内に受け入れ、彼の豊かさを私たちに移したこと、私たちの弱さを担い、彼の力で私たちを強めたこと、私たちの可死性を受け入れて彼の不死性を私たちに与えたこと、彼が地上に下り、天に昇る準備を私たちのためにしたこと、私たちと共に人の子となって、私たちを彼と共に神の子としたこと<sup>15)</sup>」である。このことが聖礼典で約束されているのである。

キリストが、パンを「取れ」と命じたのは、それが私たちのものであるという意味であり、「食せ」と命じたのは、それが私たちと「一つの実体<sup>16)</sup> (substantia)」となることを意味している。続けてカルヴァンはこれを解釈して、「十字架につけられたキリスト全部を所有すること (possidere)<sup>17)</sup>」だと言う。

ここでも彼は、「substantia」を所有の概念と結びつける。しかしこの場合、聖礼典において「与えられるのは彼の実体 (substantia) 自体ではなく、キリストの真の本性的体<sup>18)</sup>でもなく、キリストがその体をもって私たちに与えたすべての恩恵である」。当時の教会に注意を払って彼は、「キリストを靈的に<sup>19)</sup> 所有すること (obtinere) で十分満足しよう」と言う。

再び第二章の使徒信条講解に戻る。

第四部では、「神に対するこの信仰から何が私たちに返ってくるのか、また何を私たちは期待すべきか<sup>20)</sup>」を説明している。

キリストが人と「固有性の交流」や「交換」をなすことによって、次に、人と人との間で、「神を真の信仰をもって共に礼拝するすべての選ばれた人々の間で、良いものすべてを互いに交換 (communicatio) したり、分け与え (participatio)<sup>21)</sup> る」ということが、共同の教会において成り立つ、とカルヴァンは述べる。キリストと人との関係が、人と人との関係に反映されるのである。

更にこの場合、「交わり (communitas) によってすべてを分かち合いつつも、各自はおのおの独自の (singulis peculiaris) 賜物と特有の (distinctus) 役目<sup>22)</sup> もっている。…彼らは一つの体<sup>22)</sup> に集められたからである」、とあるように、交わりによって一つでありつつも、各自の独自性は失われない。

これはまさしく、父、子、聖霊の間に「関係<sup>23)</sup>(relatio)」があって一つでありつつも、それぞれが独自の「固有性」によって区別される、という神の三位一体の反映に他ならない。

以上が『キリスト教綱要初版』における三位一体論である。彼は、三位一体の神を、知的に徹底的に解明したわけではなかった。使徒信条講解に入る前に、神とキリストの存在を信じるといっただけの、ただ知的関心しか持たない態度を非難し、すべての信頼を唯一の神、キリストに置くという真の積極的な信仰を良しとしたが、この姿勢が彼の使徒信条における三位一体の神についての講解に現れている。

すなわち、聖書からの引用と古代における三位一体の用語を駆使しつつも、彼は人間の知恵の限界を認める。第二部で、キリストが父と一つであるが、位格においては区別があるということを述べた後に、「およそ人間の知恵に属するものは、ここでは抑えられ、いわば閉じ込められるべきである。それに、詮索じみた議論や逡巡によってはこのような奥義を崇めることはできない。これらの奥義は、人間のあらゆる感覚の能力をはるかに越えているからである<sup>25)</sup>」と言い、聖書によって教えられたこと以外考えないように注意してから、父なる神と子なる神に信頼を置くようと勧める。第三部でも同じように、聖霊の講解のところで、三つの区別された位格があるが、本質は一つと述べた後に、「私たちの生来の傾向によっても、舌の理屈によっても、能力によっても、これらの奥義を論証しようとしてもならないし、またできないのである<sup>26)</sup>」と言い、すべての信頼を、父なる神と、そのひとり子と、同じく聖霊にもおくように命じる。

しかしカルヴァンは、分からないものを放っておくのではない。神に信頼するという態度は、具体的には、神賛美を行う。またそれを勧める。

父については、「感謝に満ちた敬虔と熱い愛をもって崇め、すべてを捧げて仕え、すべてのことにおいて父をほめたたえるべきである<sup>27)</sup>」と述べ、子については、「キリストは永遠にほむべき神である(ローマ9章 [5節])」を引用し、<sup>28)</sup>聖霊について解説するところで、三位一体の神の奥義は、「探索するよりむしろほめたたえられるべきものである<sup>29)</sup>」と強調し、神に栄光を帰

すべきであると主張した。

「カルヴァンが神についての説教のうちで、決して思弁を用いていないことが、全くはっきりするのである。カルヴァンは、御言葉と聖礼典において御自身をわれわれに知らせたもうひとりの神を、ただひたすら讚美しようと<sup>30)</sup>とする」。

## Ⅱ. 『キリスト教綱要最終版』における三位一体論<sup>1)</sup>

### 1. 神認識論と自己認識論

『キリスト教綱要最終版』は、神認識論と自己認識論に関する次の有名な言葉で始まる。

「まさしく真実で、堅実な知恵とみなされなければならない、われわれにとって最高の知恵の殆どすべては、二つの部分、神を認識することと我々を認識すること (Dei cognitione et nostri)、から成り立っている。ところが、この二つは多くのきずな (vinculum) によって互いに結び付けられている…<sup>2)</sup>」。

これについてニーゼルは、「綱要の冒頭の言葉は、カルヴァンが、彼自身の考え出した、神と人間とについての思想を、このあとに展開させようとしている、という意味にとることはできない。神学者や哲学者は、常にそれを試みる。<sup>3)</sup>」と言う。そして、その理由として、「われわれが自分自身によって神を考えることは、何から何までみな馬鹿げたことであり、同じく神について語ることも、すべて無意味なのである<sup>4)</sup>」というカルヴァンの言葉を挙げ、聖書において神から教えを受けなければならない、その聖書はイエス・キリストを示している、と論を進める。

ニーゼルは、すべての問題をイエス・キリストに集中させるが、ここでは、三位一体論的に神認識と人間認識の「結び付き」を調べ、その後、三位一体論の内容を確認する。カルヴァンも神認識と人間認識の次に三位一体論を説くからである。

まず、『キリスト教綱要初版』における神認識と人間認識から見ていく。

最終版の冒頭の言葉は、すでに初版において現れている。

「聖なる教えのほとんどすべては、この二つの部分に含まれる。すなわち、神を認識することと私たちを認識すること (Cognitione Dei ac nostri) である」<sup>5)</sup>。

この「神を認識する」とは、私たちが「確実な信仰によって (certa fide)」確立するためには、神が永遠の知恵、正義、善、慈悲、真理、力、生命であり、天地万物は神の栄光のために造られ、神自身が公正な審判者であり、更に、神は慈悲深く寛大でもある、ということを知ることである。<sup>6)</sup>

また、「私たちを認識する」とは、次のことを知ることである。私たちの父祖アダムは、「神の像と相似 (imago et similitudo Dei)」に従って造られた。すなわち、恵の「賜物 (donum)」である知恵と義と聖性が与えられており、神から与えられた完全な「性質 (natura)」にとどまっていたら、「神の内に (in Deo)」生き続けることが出来たのだが、アダムの墮罪で、「神の像と相似」は破壊した。天からのすべての良い賜物が失われたのである。その結果、すべての知恵、正義、力、生命は剝奪され、「神の内に (in Deo)」<sup>7)</sup>いなければ、これらのものは所有できない。その後、カルヴァンは、この罪の状態を知るために律法が与えられたこと、これは誰にも守られないのでキリストによる罪の許しが必要なことに触れる。

これは初版の「第一章 律法について」の冒頭部分で、十戒の前置きとして述べられたことであるが、ここでは、神認識論と人間認識が結ばれていることは明言されていない。それぞれの認識について述べ、ただ神と人間の関係は、墮落がなければ人間は「神の内に (in Deo)」生きていたのだ、という表現をする。

『キリスト教綱要最終版』では、神認識と人間認識が、「きずな」によって結び付けられている、と明言した後に、その結び付き方を説明する。

「第一に、ただちに神——われわれがその内に生き、また動かされているところの神 (in Deo vivit et movetur) ——への瞑想に思いを向けない限りは、誰一人として自分自身について考察することができないのである。なぜなら、われわれの力によってもって立つ賜物が、どれひとつとしてわれわれ

自身からのものではないことが明らかであり、それのみかわれわれがこうして生きている存在そのものが、ひとりの神における存立 (in uno Deo subsistentiam)<sup>8)</sup> に他ならないからである」。

この言葉を理解するために、「神についての知識と我々についての知識 (Dei nostrique notitia) は、互いに結び付いているが、正しく教える順序としては、まず前者について論じ、次に後者を取り扱うように下っていくことを要請する<sup>9)</sup>」とカルヴァン自身が言う通りの順序に従って、まず神認識論から考察する。

神を知るということ (Dei notitia) は、単に神の存在 (esse) を知るということだけでなく、神を知ることが神の栄光 (gloria) にどのように役立つか、ということを理解することである。また、我々の精神は、神に何事かの礼拝 (cultus) を捧げるのではなく、神を理解すること (apprehendere) はできない<sup>10)</sup>。当時のスコラ学者を意識してカルヴァンは、「神とは何か (quid sit Deus)」というのは思弁に過ぎず、「神はどのようにあるのか (qualis sit)」、また、「何が神の性質としてふさわしいか (quid eius naturae conveniat)」、が我々にとっては重要である、<sup>11)</sup> と言い及ぶ。

このように、カルヴァンは、神の存在が私たちにかかわり深いものであることを述べ、私たちは、神を知り、栄光を帰し、礼拝を捧げる、という神との緊密な関係にあるべきであることを語る。

初版の「神の内に生きる」とは、最終版の引用から使徒17章28節の言葉と分かるが、この引用によってカルヴァンは、神と人間の密接な結び付きを示唆しているのである。そして、私たちの存在が、「ひとりの神における存立 (in uno Deo subsistentia)」とまで彼は言う。この表現は実に、三位一体を表現する時に用いられる表現である<sup>12)</sup>。つまり、ひとりの神の中に、父、子、聖霊の三つの存立があるように、ひとりの神の中に、私たちが存立している、と彼は示しているのである。

それは、神の三位一体が私たちにおいて反映されるということであり、その意味で、神認識と人間認識は三位一体論的に結び付いている、と言える。



## 2. 三位一体論

カルヴァンは、『キリスト教綱要最終版』の第一篇では、第十三章で三位一体論を解説するが、その前に十二章の「神は偶像と区別され、ただ神のみが全き礼拝を受けたもう」で、「われわれは、ひとりの神を持つこと(unum Deum habere)と願うなら、このことを記憶しよう。神の栄光をいささかでも傷つけまいとするならば、神に固有なもの(proprium)を固く保つようにするほかない<sup>13)</sup>」と述べ、ひとりの神を持つことと、その神に固有なものを固く保つことの重要性を説く。そして、三位一体論に進む。

彼は第十三章で、「聖書においては、唯一の神の本質(essentia)が、創造の時以来教えられている、その中に三つの位格(persona)が含まれている」と題するが、基本的には、「すべての人の信仰が『御父と御子と御霊とが神であり、しかも、御子が御父なのではなく、御霊が御子なのではなく、それぞれの固有性(proprietas)がはっきりしている』という点で一致してさえいけば、これらの用語は葬り去られた方がよい<sup>14)</sup>」と考えている。

その上で、種々の用語が解説される。

まず、ヘブル1章3節の、神の子は、「父のヒュポスタシスのしるし(character hypostaseos)」と呼ばれているところを挙げ、この場合のヒュポスタシスは、「存立(subsistentia)」を意味し、この存立において、父は子から区別される。つまり、父はその固有性においては、子と区別されているが、ご自身を全く子において現わしたのだから、父のヒュポスタシスが子において明らかにされたのである<sup>15)</sup>、と解する。

また、古代においてなされた論争の結果与えられた、「ひとつなる神のうちに、三つの『固有性』がまさに認められなければならない(in uno Deo tres proprietates)」、「ひとりの神のうちに、あるいは、神の単一性のうちに、位格の三一性が存立する(in uno Deo subsistit, seu in Dei unitate subsistit personarum Trinitas)<sup>16)</sup>」という定式を受け入れる。

そして、位格については、「わたしが『位格(Persona)』というのは、『神の本質における存立(subsistentia in Dei essentia)』のことであり、これは他の『存立』と関係を持ちながら、交流することのできない固有性(proprietas

incommunicabili)によって区別されるものである」、と解釈する。言い換えると、「この三つの存立のそれぞれが、他の存立に関係しながら、固有性によって区別されるとわたしは言う。ここに『関係(relatio)』がはっきり表明される<sup>17)</sup>」、ということである。『神』という名は相互の関係を含んだ意味で(relative)理解される<sup>18)</sup>」からである。

以上のように、カルヴァンは「位格(persona)」を「subsistentia」や「proprietas」だとして、他の位格から区別されるものとして説明した。またそれは、区別がなされたうえで、他の位格と関係を持つ。

以上で彼が用いている「proprietas」という語は、「proprius」という形容詞の名詞形であるが、この「proprius」を用いて、更にカルヴァンは、種々の説明をする。

御父が私たちに恵みを施すことに関して、御子自身も御父と共通の(communio)権能を持っている<sup>19)</sup>と述べてから、御霊について、「聖霊は、…それ自身の固有(proprius)の力によって、新生の創始者でありたもう。要するに、彼には、御子においてと同時に、神としての働き、(divinitatis officia)に極めて固有な(proprius)いっさいのものが帰せられているのである<sup>20)</sup>」、と言う。

ここで分かるように、カルヴァンは、「proprius」という用語を、二通りの意味に使い分ける。

ひとつは、「聖霊それ自身の『proprius』』と言うことで、位格に対して用いる(「proprietas」も専らこの意味で用いられる)。もうひとつは「神としての働きに『proprius』』と言うことで、一体なる神に対して用いるのである。後者はこの節の冒頭で述べた「神に固有なもの(proprium)」と同じ使い方である。「神に対して固有」ということが何を意味するかは、次の二箇所から更に明確になる。

「神にとっては『存在する(esse)』』ということにもまして、より固有なこと(proprium)は何もない…。すなわち、『存在する方が(Qui est)私をあなた方につかわされた』』と言われるとおりでである(出エジプト3章14節)<sup>21)</sup>」。また、「神にとって固有のもの(Dei proprium)としては、『永遠性(aeternitas)』』と『自己存在』』言いかえればいわば自己自身によって存立すること(αὐτόοσια, id

est, a seipso existientia) 以上のものはない…」。<sup>22)</sup>

つまり、「esse」や「existientia」、「aeternitas」が、一体なる神の持つ性質と言える。そしてカルヴァンが、一体を表す語として「本質(essentia)を用いたのは、この「存在する(esse)」に由来する。

前節でも述べたように、こういう「(自己)存在の」、「永遠」なる神は、人間と密接な関係にある。出エジプト34章6、7節を「…ここに神の『永遠性』と『自己存在』が二度くりかえされている偉大な御名によって述べられている…。…神のもろもろの力について言及がなされ、それによって、『神が神自身として何であるか(quis sit apud se)』ではなく、『我々に対して何であるか(qualis erga nos)』が我々に向けて述べられている」と彼は解釈する。<sup>23)</sup>

また『最終版』でも、所有の概念が強く現れる。きずな(vinculum)である聖霊によってのみ、キリストと我々はひとつになり、彼の肢体になる。こうして、「我々は彼のもとに保たれ、他方彼を所有するのである(possideo)」<sup>24)</sup>。逆に、「父なる神の寛容により、聖霊の効力(efficacia)によって、キリストにあずかる(in Christi participatione)に至らせられたすべての者は、神の財産、神の固有の所有物として(in Dei peculium ac propriam possessionem)分けて置かれる」とあるように、神も私たちを所有するということも言われる。<sup>25)</sup>

『キリスト教綱要初版』に比べて、『キリスト教綱要最終版』では、解説が詳細になる。<sup>26)</sup>三位一体論に関する用語が多く出て来る。なかでも、「proprius」を頻繁に用いる。そして、これを二通りに用いていることは、特記すべきことである。

更に、ここからどういう意味が引き出されて来るのだろうか。また、それはどこに由来するものなのだろうか。

### Ⅲ. カルヴァンの三位一体論の教理史的考察

#### 1. 三位一体論に関するカルヴァンの用語

前の章までを見れば分かるように、カルヴァンは、三位一体論を解説する時に、それがどんな用語であれ、人間との関係について触れている。神の存

在、三位一体の在り方が、人間の在り方とかかわりをもってくるのである。また、それらは、所有や関係、交流という緊密な結び付きで表現される。

そして、「proprius」という語を多用して、父、子、聖霊が一体でありつつも、それぞれの間に区別があることを示す。すなわち、この語は一方で、父、子、聖霊の各位格に対して「固有の」という意味で用いられる。またもう一方で、神全体に対して「固有の」という意味で用いられる。二通りの意味で使われたのである。

しかし、そうすると、「proprius」という語は、それ一語で、相対する二つの意味を持つことになるのである。問題は、後者である。神に固有、と言うとき、神は父、子、聖霊の三位一体の神であるから、父、子、聖霊の三位格に対しても固有、と言うことができる。カルヴァンは、神に固有なものとして、例えば「存在」を挙げていたが、神に「存在」が固有であるなら、父、子、聖霊の三位格に対しても「存在」は固有である。従って、父、子、聖霊は三位格共に「存在」を「共通」に有している、「共有」している、と言えるのである。

ところで「共通の」、「共有の」、すなわち、ラテン語の「communis」とは、<sup>1)</sup>「固有の(proprius)」の反意語である。よって、相対する二つの意味を持つことになる、と言えるのである。

確かに、「御父は、御子と共通(commune)でない固有の(proprius)何かをうちに持っておられるのでなければ、御子と異なる<sup>2)</sup>ところはない」という文から、「共通」が「固有」と相対する意味を持つということは、カルヴァンも承知していたことがわかる。このように、ある位格が他の位格に対して「固有」、と違って区別を示す一方で、彼はまた別のところで、「神の本質は、全体として、また確実に、御父と御子とに共通だ<sup>3)</sup>」、「御父とキリストに共通な聖霊<sup>4)</sup>」という表現をして、各位格の共通性も示す。

つまり「proprius」には、反語である「communis」の意味が加味されているのである。

こういう用語の使い方を分析するために、次に、カルヴァンが影響を受けた二人の古代の神学者の三位一体論を調べることにする。

## 2. テルトゥリアヌスの三位一体論

テルトゥリアヌス(Tertullianus, 160～230)は、最初の西方の神学者であり、その著『プラクセアス反論』は、古代教会における三位一体論についての最初の体系的著作である。

テルトゥリアヌスは最初に、神自身に対して用いられている用語と、父、子、聖霊の各位格に対して用いられている用語を確定する。「すべて(父、子、聖霊)は、一人(の神)から、すなわち実体(substantia)の統一性(unitas)を通して生じるのであり、それにもかかわらず統一性を三一性(trinitas)へと秩序づけている経緯の秘義は守られている。このような意味において、すべてが一つである。…父、子、聖霊が三つであるというのは、本質(status)ではなく、相対的な位置(gradus)についてであり、実体(substantia)ではなく、形相(forma)についてであり、力(potestas)ではなく、それを担う具体的存在(species)についてである。この三つは一つの実体、本質、力に属している<sup>5)</sup>」。神は一つであるが、父、子、聖霊という名で、相対的位置、形相、具体的存在が生じると考えられるのである。

この父、子、聖霊は、相互に「切り離されない(inseparatus)」ものであるが、それぞれ「別(alius)」である。これらの間にあるのは、「分割(divisio)」ではなく、「区別(distinctio)」である<sup>6)</sup>。そう述べてから彼は、区別について、所有概念を用いて説明する。

父と御子は同じではない。父がいるから子なのであり、子がいるから父なのであって、「相互の関係から(ex alterutro)」生成するものは、自分自身の力で自分自身になることは決してできない。父が父であるためには子を持つ必要があり、子が子であるためには父を持つ必要がある。「(何かを)持つ」ということと「(何かで)ある」ということは、別である(Aliud est autem habere, aliud esse)。だから、父が御子を持つことは、父は御子であるということではなく、御子とは別のものである、ということである<sup>7)</sup>。

そして、各々の位格は「固有性(proprietas)」と呼ばれる<sup>8)</sup>。御子が「私は父の中におり、父は私の中にいる」と言う時、まさしくこのことから兩位格の「固有性(proprietas)」は明かである<sup>9)</sup>。

また各位格は、「proprius」を用いて、「固有の名前と位格において (in suis propriis nominibus et personis)<sup>10)</sup>」、というようにも表現している。

テルトゥリアヌスは、各位格の間に区別があることを「proprius」や「proprietas」で表現し、更に、実体的な考えで、「持つ」という所有の概念を用いて、その区別を一層明確にする。父、子、聖霊はお互いがお互いを持ち合っているのである。

そして最後の章で、この「持つ」という関係が、神と人間との間にもあることが示唆されている。「御子を御子とは別な方と信じる者は、御子を持っていないのである<sup>11)</sup>」。つまり、御子を御子として正しく信じることで、信仰者は御子を持つのである。

以上からわかるように、テルトゥリアヌスの『プラクセアス反論』において、「proprius」は本来の「固有の」という意味でのみ用いられている。

### 3. アウグスティヌスの三位一体論

アウグスティヌス (Augustinus, 354~430) は、400年頃から『三位一体論』を書き始めるが、それが古代における三位一体論の完成と言い得る。

カルヴァンは、三位一体論を説明するために、「人間界の事柄にたとえて引くことが適切であるかどうか、わたしにはわからない。とにかく、昔の人はよく、こういう事をしたものである<sup>12)</sup>」と言って、三位一体論を人間界の事柄にたとえることを否定的に受け取っている。そこで、アウグスティヌスの『三位一体論』の主として前半部分から、今問題になっていることについて書かれている箇所を読み取っていく。後半部分は、主として人間の魂における三位一体の似像を述べているからである。

まず三位一体の用語に関して、一体の概念として、「実体 (substantia)」、「本質 (essentia)<sup>13)</sup>」を、また三位の概念として、「個々の (singulus)」、「位格 (persona)<sup>14)</sup>」を用いる。

そして、この位格に関して、「父は子を持つからこそ父と言われ、また子は父を持つからこそ子と言われる」のは「関係によって (secundum relatiuum)<sup>15)</sup>」である。

位格は、他に「proprius」の副詞形「proprie」でも説明される。例えば、アウグスティヌスは、『「神のみ不可死性を持ち、…見ることができない(第一テモテ前6章16節)』と使徒が語ったことは三位一体ではなく、特に固有の意味で(proprie)御父にのみ適合する<sup>16)</sup>』と説明する。

この用法は、「proprius」本来の「固有の」、それのみに属する、という意味での用法であるが、これに彼は、もう一つ別の意味を着せている。

聖霊は父の霊でもあり、子の霊でもある。また、聖霊は父と子の言いがたき「交わり(communio)」である。その次に彼は、こう言う。「そして、聖霊は同じ名称が父と子にも共通し得るからこそのように名付けられるのであろう。父は霊であり、子も霊であるから、聖霊は父と子に共通の意味で(communiter)語られることが固有の意味で(proprie)も語られるのである<sup>17)</sup>」。つまりこれは、父と子は別の位格であるが、同じ霊を持っているので、別(「固有」とも言い得るし、同じ(「共通」とも言い得る、とアウグスティヌスは解釈しているのである。

同じ霊を持つ父と子の位格に関してだけ、こういう議論が可能なのではない。三位一体なる、父、子、聖霊のどの位格についても同様のことが言えるのである。それは、彼自身が言っているように、「神についてふさわしく語られると見えるすべてのことは、唯一なる神である三位一体全体と同じように、三位一体における各の位格にもあてはまる<sup>18)</sup>」からである。神にあてはまることなら、神は三位一体なので、父、子、聖霊の各位格にもそれぞれ同じようにあてはまるのである。「固有」という語は、このようにして「共通」という正反対の意味が加味されるのである。

#### Ⅳ. 結 語

カルヴァンは、第一に、三位一体の神を説明する時に用いる用語を所有の概念と結び付け、神と人、また人と人の繋がり**の強さを強調し、第二に「proprius」を用いて各位格の固有性と、各位格が神として共有しているものがあることを明示し、第三に、使徒17章28節との関連で、三位一体の定式**

の中の位格を人にも適用した。カルヴァンの三位一体論の内容は、実に豊かである。そして、神学用語や思想の多くを、古代の神学的遺産に負っていることが、以上の検討より明かである。

しかし、特にカルヴァン独自と言い得るものは、第三の点である。使徒17章28節は、アウグスティヌスがその著『三位一体論』で、三位なること、一体なることを説き明かしていく中で5回も引用した箇所である<sup>1)</sup>。これをカルヴァンはとらえ直して、人間を含めた新たな三位一体論理解に達したのである。それは、「ひとりの神の内に三つの存立(subsistentia)」という三位一体論の定式の「存立」という言葉を、使徒17章28節「神の内にわれわれは生き、動き、…」との関連で、人間にあてはめた、という点である。「存立」とは、父、子、聖霊の各位格のことである。カルヴァンは、創造の秩序においては、また墮落後の回復においては、神<sup>2)</sup>にあって人間ひとりひとりが、その父、子、聖霊の各位格に等しいほどのもの<sup>3)</sup>だというのである。そのことを彼は、三位一体論の定式の中で、はっきりと位置付けたのであった<sup>4)</sup>。

#### (注)

##### はじめに

- 1) カルヴァンの神学について叙述した研究書の中で代表的なものに、ニーゼル(Wilhelm Niesel, 1903年生)の『カルヴァンの神学』(Niesel, W., Die Theologie Calvins, München 1938, [渡辺信夫訳, 『カルヴァンの神学』新教出版社, 1960])がある。彼は、「第三章 三位一体」で三位一体論を取り扱っているが、他の章と比較して、量から言っても僅少であるし、「第一章 これまでの研究」を除くと、参考文献が「特に文献無し」なのは、この章だけである。この著書は、彼自身が「カルヴァンがその教理のすべての部分にわたって、ただ一つのことだけを、すなわち、肉において啓示されたもうた神だけを、問題にしたということを十分はっきり示した」(Ibid., S.245, [渡辺訳による、以下同様])と述べているように、カルヴァンの神学をあらゆる点でイエス・キリストの一点に集中させて論じており、三位一体にはそれほど考慮を払っていない。

『カルヴァンの三位一体論』という論文題で、カルヴァンの三位一体論を正面から取り扱った神学者には、プリンストンのウォーフィールド(Benjamin B. Warfield, 1851~1921)とエディンバラのトーランス(Thomas F. Torrance, 1913年生)がいる。ウォーフィールドは、イエス・キリストの「*αὐτοθεός*」を中心に



してカルヴァンの三位一体論を論じ、その三位一体論が西方のテルトゥリアヌス、アウグスティヌスの三位一体論に連なりつつも、「三位一体論の歴史において、画期的な一時代(an epoch)を画している」(Warfield, B.B., IV, Calvin's Doctrine of the Trinity, Calvin and Augustine, 1980, p.283)と主張する。

他方トーランスは、東方の神学者たちの三位一体論を分析して、「アウグスティヌスからの引用を思慮深く用いているにもかかわらず、カルヴァンの三位一体論の理解がむしろ、アタナシオスや、ナジアンゾスのグレゴリオス、アレクサンドリアのキュリロスといったギリシア教父たちの理解により近かった」(Torrance, T.F., "Calvin's Doctrine of the Trinity," Calvin Theological Journal, Volume 25, November 1990, Michigan, p.179)と論じている。

ミュンスターのエッサー(Hans H. Esser)に、『カルヴァンは弱様態論的三位一体論者であるか?』と題する論文がある。これは、ヴォルフ(E.Wolf)が1936年に提示した「カルヴァンは弱様態論者である」というテーゼに対して著されたものである。エッサーは、パウロ、ヨハネから始めて、テルトゥリアヌス、アウグスティヌス、そしてカルヴァン自身の論をそれぞれ検討して、ヴォルフの主張に無理があることを説き、カルヴァンの三位一体論が、「三位」に比較して「一体」をより強調した西方の伝統に依存したものであるとした(Esser, H.H., "Hat Calvin eine ›leise modalisierende Trinitätslehre‹?," hrsg., von W.H. Neuser, CALVINUS THEOLOGUS, 1976, S.129)。

以上がカルヴァンの三位一体論を取り扱っている主要な著作・論文であるが、それぞれに特徴があるものの、西方であれ、東方であれ、古代の三位一体論との関係を述べている点では一致している。ニーゼルもこの点では一致している。「カルヴァンは、三位一体の教理を教父たちから伝えられたままに、すべての神学的な武器〔としての概念〕とともに、踏襲した」(Ibid., S.54)。しかし、カルヴァンが三位一体論を説明し、解釈する時に用いた用語が、古代においてどういう意味を持っていたか、その時のどういう解釈をカルヴァンが継承し発展させていったのかは詳細に考察されていない。

トーランスが着目しているように東方の神学とカルヴァンの神学の関係も見落とせないが、カルヴァンがラテン語でまず『キリスト教綱要』を書いていることから、本論文では、古代の西方の三位一体論との関係に焦点をあてて、カルヴァンの三位一体論を分析していくことにする。

- 2) カルヴァンの神認識論、自己認識論を取り扱った研究書はいくつかあるが(Warfield, B.B., II, Calvin's Doctrine of the Knowledge of God, Calvin and Augustine, 1980; Dowey, E.A., The Knowledge of God in Calvin's Theology, New York, 1952; Parker, T.H.L., The Doctrine of the Knowledge of God, A Study in the Theology of Calvin, Edinburgh and London, 1952)、本論文では神認識論や自己認識論と三位一体論を別々にはではなく、併せて論じることを試みたものである。

## I

- 1) 1536年に出版された『キリスト教綱要初版』(Ioannis Calvini Opera selecta I, P.Barth, W.Niesel, D.Scheuner, München,1926~1952. 以下OSと略す; 久米あつみ訳、『キリスト教綱要初版』[『宗教改革者著作集9, カルヴァンとその周辺I』] 教文館、1986、本論文では原則としてこの久米訳を用いた)は、全1巻、516ページの小型本であった。序文の後は、ルターの教理問答の形式に倣って、第一章から第四章までは、律法(十戒の講解)、信仰(使徒信条講解)、祈り(主の祈りの講解)、聖礼典を解説している。ここまでは、教理問答的に書かれている。続く第五章は、堅信礼、悔悛、終油、叙任、結婚の残る五つの聖礼典について述べ、それが真の聖礼典でないことを示す。最後の第六章は、キリスト者の自由について述べ、1534年の橄文事件に関する処罰に対して抗議し、また、教会と国会の関係について述べ、当時のフランスの王室の態度に対する抗議をした。第五章、第六章は、論争的な文書となる(F.Wendel, Calvin: The Origins and Development of his Religious Thought, tr. by Mairet, P., 1965, p.112を参照)。

カルヴァンは、三位一体論については、第二章「信仰について」で、使徒信条講解という形で解説する。使徒信条は四つの部分に分けられ、「そのうち最初の三つは聖なる三位一体に当てられたものである。すなわち父と子と聖霊の三位一体であって、永遠かつ全能の唯一なる私たちの神であって、私たちはこの神を信じている。四番目の部分は、神に対するこの信仰から何が私たちに返って来るのか、また何を私たちは期待すべきかを説明している」(OS I, S.70)。

彼によれば、信仰とは、父、子、聖霊なる三位一体の神に対する信仰である。その信仰内容を論じるに当たり、使徒信条の「私は信じる(Credo)」を、「私たちは、…公言する(profitemur)」(信条第一部)(OS I, S.75)、「私たちが告白するのは…(confitemur)」(第二部)(OS I, S.77)、「私たちは、…告白する(confitemur)」(第三部)(OS I, S.85)、「私たちは、…信じる(credimus)」(第四部)(OS I, S.86、ここは、カルヴァンの言い換え通りに私訳した。以下、OS I, S.91; OS I, S.92; OS I, S.93、においても言い換えがなされている)とすべて、複数一人称の「私たちは…」と言い換えて、この信仰告白が私たちすべての告白であることを志向し、告白者たちの共同体的な位置付けをしている。

- 2) OS I, S.69.  
 3) OS I, S.69.  
 4) OS I, S.69,70.  
 5) OS I, S.75、ここで用いられている「本質(essentia)」という語は、「存在する(esse)」から来る語である。用語としてこれらを用いるが、抽象論に終わらないように、神の存在とのかかわりをカルヴァンは強調する。また、三位一体の表現として他には、東方教会の「一つの *οὐσία*、三つの *ὑπόστασις*」を訳して「一つの *substantia*、三つの *subsistentia*」、「一つの *essentia*、三つの *persona*」という語も用いている(OS I, S.72)。

他に、「まことに一人の神の中に三つの固有性が認められなければならない」、「父と子と聖霊はひとりの神であり、しかも子は父ではなく、聖霊は子ではなく、おのおの固有性によって区別されているという、この信仰が存続すればよいのだ」(OS I, S.75)とも説明している。

- 6) 「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一である。」
- 7) OS I, S.71, 「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、」
- 8) OS I, S.75.
- 9) OS I, S.79,80.
- 10) OS I, S.78, ここでカルヴェンが「固有のもの(proprium)」という語を使っているので、それを明確にするために前半は私訳によった。
- 11) OS I, S.80.
- 12) OS I, S.80, 「二つの本性の固有性」は、「神性(divinitas)」と「人性(humanitas)」を指す(OS I, S.79)。
- 13) OS I, S.118.
- 14) OS I, S.137.
- 15) OS I, S.137.
- 16) OS I, S.137.
- 17) OS I, S.139.
- 18) OS I, S.142.
- 19) OS I, S.140.
- 20) OS I, S.70.
- 21) OS I, S.91.
- 22) OS I, S.92.
- 23) OS I, S.72.
- 24) OS I, S.69.
- 25) OS I, S.77.
- 26) OS I, S.85.
- 27) OS I, S.76.
- 28) OS I, S.81.
- 29) OS I, S.85.
- 30) Niesel, W., op. cit., S.58.59, 参照、渡辺訳『信仰の手引き [改訂版]』、三「神について知るべきことは何か さて、神の尊厳はそれ自体人間の理解力を越え、把握することが出来ない。そのため私たちは、これを詮索するよりはむしろ、この崇高さを崇めなければならない」、11頁以下；外山訳『ジュネーブ教会信仰問答』「問六 では、神についての真の正しい知識は何ですか。答 神を崇める目的で神を知るときであります。」10頁。

神の栄光を求め、神を礼拝する。すなわち、頌栄が『キリスト教綱要』を通して、最終的に読者に要求されていることである。この態度こそ、彼が最後まで読者に訴

え続けたものであることは、『キリスト教綱要最終版』の最後の言葉が証明している。「神を賛美せよ(LAUS DEO)」(Inst. IV, 20, 32; OSV, S. 502.)。

## II

- 1) ここで、『キリスト教綱要最終版』の構造について、若干述べておく。『キリスト教綱要』を英訳したF. L. バトルズは、キリスト教史上、生涯にわたってその思想が絶えず変化し続けて発展していった神学者と、神学を手掛けた時から後に至るまで確固とした一定のある型を持っていた神学者の、二種類の神学者がいて、『再考録』を書いたアウグスティヌスは前者のタイプで、後者を代表するのがカルヴァンであると通常指摘されることを挙げている(Battles, F. L., Analysis of the Institutes of the Christian Religion of John Calvin, 1980, p. 12)。しかし、「確固とした一定のものであったにもかかわらず、『キリスト教綱要』は実際に、その文学史の流れの中で変化しているのである。そして、その変化は、当時の絶え間無い神学論争に対するダイナミックな応答の中でなされたものだ」(Idem.)、と続けている。

1536年に出版された『キリスト教綱要初版』は確かに、その後成長を遂げていった(以下、F. Wendel, op. cit., p. 46ff; p. 69ff; p. 112ffを参照)。

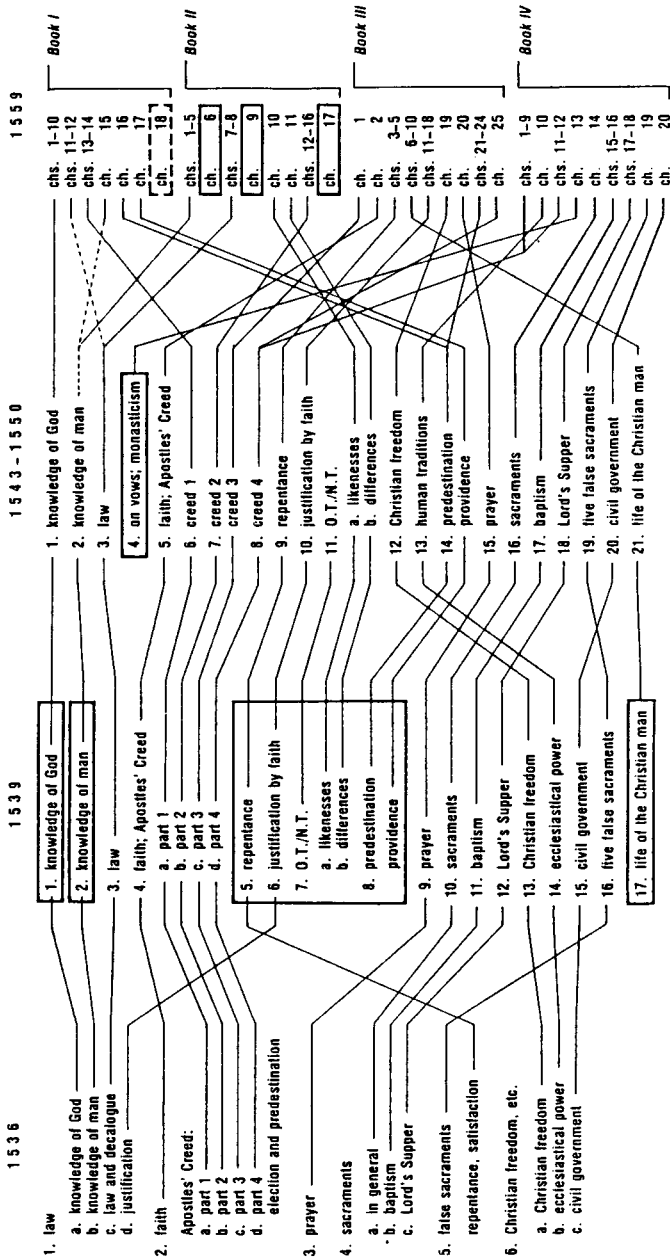
1539年版では、内容は初版の三倍近くなり、十七章になる。この版は、新たに加えられた神認識と自己認識に関する二つの章によって始まる。1537年に作った『教理問答』やその要約である『ジュネーブ教会信仰告白』に、「三位一体」という語がないと、ローザンヌの説教師カロリに異端だと非難されたことがあり、その後カルヴァンは三位一体論について神経質になる。また、スペインの医者でもあり神学者でもあったセルヴェトゥスの1531年の『三位一体の誤謬について』や、1532年の『三位一体論論議』をおそらく読んだことがもとで、三位一体論をかなり広げた。更に1543年版と1550年版において、1539年程ではないが、追加されていった。

『キリスト教綱要最終版』は、1559年に出版された。ここでは四分の一増補されて、「創造主なる神を認識することについて」、「贖い主なる神をキリストにおいて認識すること、彼はまず律法のもとに父祖たちにあらわされ、ついで福音において我々にあらわされたもうた」、「我々はどうのようにキリストの恵みを受けるか、そこからどのような実りが生じるか、それにとまなう効果は何か」、「神が我々をキリストとの交わりに招き、そこにとどめおかれる外的手段ないし支えについて」の四篇、八〇章になる。

そして、1550年版から1559年最終版になる時に、決定的な変化が起こっている。1550年版までは、三位一体論は使徒信条講解という形で一箇所にまとめられていたが、最終版では、その講解が分断されて、使徒信条の第一部は第一篇に、第二部は第二篇に、第三部は第三篇に、第四部は第四篇に、それぞれ嵌め込まれた(次ページの表を参照。Battles, F. L., op. cit., p. 15より)。言わばここで、『キリスト教綱要』全体が使徒信条の講解書となり、三位一体論の解説書となったのである。

SHIFTS AND ADDITIONS OF MATERIAL  
IN THE FIVE CHIEF LATIN EDITIONS  
OF THE *INSTITUTIO*

(Boxes indicate new material; only main editorial block is shown)



「カルヴァンは、古代の教義に照らして聖書を読んだ。彼にとって三位一体論は、ある重要な解釈法則の機能を持っていた。このことは、次のことにおいても証明される。すなわち彼は、1559年の綱要においてはもはや、ルター的な律法-信条-祈りという順序をとらず、使徒信条の三位一体論的構造をとったのである」(Nijenhuis, W., Calvin Johannes, in: TRE, VII, 4/5, 1981, S.582)。

こうなる背景の一つにセルヴェトゥス事件があった。セルヴェトゥスは、続けて1553年に『キリスト教の再建』という本を書き、三位一体論を辛辣に批判するのだが、それ故に彼は、カルヴァンの要請で逮捕され、告発、裁判、処刑をうけた。翌年カルヴァンは、『三位一体の正統教理の擁護』を書き、このセルヴェトゥス事件の弁明をしたためたのであった。このようなこともあって、カルヴァンは『キリスト教綱要』全体を三位一体論的に強固にまとめあげたと考えられる。

1543年以降、カルヴァンは、『キリスト教綱要』の読者にあてた前書きの最後に、アウグスティヌスの「私は進歩しつつ書き、書きつつ進歩する人のひとりであることを告白する」という言葉を引用している(OSⅢ, S.7.)が、彼はここで、書きながら、また学びつつ、考えが発展展開していくことを示していたのである。また、最終版の前書きで述べているように、この最終版がでるまで「決して満足を感じたことはなかった」(OSⅢ, S.5.)のである。

バトルズによれば、カルヴァンが決して満足を感じず、『キリスト教綱要』を拡大、補充していったのは、第一に、聖書や教父たちの著作、その注解書、特にアウグスティヌスやクリュソストモスの影響、第二に、M. ブーツァーの影響、第三に、1538年から1541年までの牧会の経験、第四に、三位一体論を攻撃していたカロリヤセルヴェトゥスといった異端者たちとの論争、第五に、彼の活動の場であったジュネーブでの実践による、とまとめている(Battles, F.L., op. cit., p.13f)。

彼は常に自己を修正し、完璧を期していた。

- 2) Inst. I, 1, 1; OSⅢ, S.31, 一部私訳による。以下渡辺訳による。
- 3) W. Niesel, op. cit., S.24.
- 4) Inst. I, 13.3, OSⅢ, S.112.
- 5) OS I S.37, 私訳による。以下久米訳による。
- 6) Idem.
- 7) OS I S.38.
- 8) Inst. I, 1, 1; OSⅢ, S.31, 使徒17章28節参照。
- 9) Inst. I, 1, 1; OSⅢ, S.34, 「cognito」と「notitia」については、バトルズの次の解説を参照のこと。

“The words, cognito/notitia are used interchangeably by Calvin. Knowledge, whatever the word employed, is for Calvin never ‘mere’ or ‘simple’ or purely objective knowledge, which is his most definitive, brief statement on the meaning of knowledge in a religious context. Probably ‘existential apprehension’ is the nearest equivalent in contemporary parlance.”

CALVIN, Institutes of the Christian Religion 1, translated and indexed by F.D. Battles, 1960, p. 35, n. 1.

- 10) Inst. I, 2, 1, OS III, S. 34, ここでは、「墮落した人間が、仲保者キリストにおいて神を『賤い主』としてとらえる特別な知識については、ふれられない。この世界にある御手のわざのうちに、単純に「創造主」として知られることが取り扱われる。神の認識は、『二重(duplex)』である」(idem.)。
- 11) Inst. I, 2, 2, OS III, S. 35.
- 12) 次節を参照。
- 13) Inst. I, 12, 3; OS III, S. 107, また、十戒の第一戒の解説を参照。「…あなたはわたしの顔の前に他の神々を持ってはならない。(Ne habeamus…)、…われわれは神を持つ(habere Deum)とき、同時にかれに固有なもろもろのことを把握しないではおれない。従って『他の神々を持ってはならない』と禁じたもうとき、これはかれに固有なもの(quod sibi proprium est)をわれわれが他のものに移してはならない、という意味である」(Inst. II, 8, 16; OS III, S. 357.)。
- カルヴァンは、「*proprium*」と「*proprietas*」の両方を用いるが、この両者の違いについて、トーランス氏(エディンバラ大学名誉教授)から、緒方純雄氏(同志社大学名誉教授)を通してコメントをいただいた。…The distinction between *proprium* and *proprietas* is that the former is more concrete and personal; and the latter somewhat abstract, but they translate Greek terms *idios* and *idiotes*.…”
- 14) Inst. I, 13, 5; OS III, S. 114. 最終的には、「われわれがひとりの神を信じると告白する時、その神の名のもとには、唯一・単一の本質(*essentia*)が理解されており、そしてこの本質のうちに三つの『位格(*persona*)』ないし『存立(*hypostasis*)』がわれわれに把握されるのである」(Inst. I, 13, 20; OS III, S. 134)、とまとめている。
- 15) Inst. I, 13, 2; OS III, S. 110.
- 16) Inst. I, 13, 4; OS III, S. 113.
- 17) Inst. I, 13, 6; OS III, S. 116.
- 18) Inst. I, 13, 24; OS III, S. 142.
- 19) Inst. I, 13, 13; OS III, S. 127.
- 20) Inst. I, 13, 14; OS III, S. 128.
- 21) Inst. I, 13, 23; OS III, S. 142.
- 22) Inst. I, 14, 3; OS III, S. 155.
- 23) Inst. I, 10, 2; OS III, S. 86. 出エジプト34章6、7節「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。『主、主、哀れみ深く恵みに富む神、忍耐強く慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを許す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代にまでも問う者。』」
- 24) Inst. III, 1, 1~3; OS IV, S. 1~5.
- 25) Inst. IV, 1, 3; OS V, S. 7.
- 26) この節で述べた点以外は、三位一体論に関しては、だいたい『キリスト教綱要初版』

の主張の踏襲、ないしは拡充である。

### Ⅲ

- 1) LEWIS and SHORT, "proprius," A LATIN DICTIONARY, OXFORD, 1879, p.1472.
- 2) Inst. I, 13.23; OSⅢ, S.142.
- 3) Idem.
- 4) Idem.
- 5) Adv.Prax., II, 4,表にすると、次のようになる。

神	父、子、聖霊
status	gradus
substantia	forma
potestas	species

ここでは、まだ「persona」は出て来ない。Adv.Prax., XIIを参照。

- 6) Adv.Prax., IX, 1.
- 7) Adv.Prax., X, 1.
- 8) Adv.Prax., XI, 10.
- 9) Adv.Prax., XXXIV, 7.
- 10) Adv.Prax., XXXI, 2.
- 11) Adv.Prax., XXXI, 3.
- 12) Inst. I, 13.18; OSⅢ, S.132.
- 13) De Trin., I, II, 4,他。
- 14) De Trin., I, VI, 12,他。これらの用語は、「それらが語られるためではなく、沈黙しないため」(V, IX, 10)に用いられる。
- 15) De Trin., V, V, 6.
- 16) De Trin., II, IX, 15.
- 17) De Trin., V, XI, 12.
- 18) De Trin., XV, V, 7.

### Ⅳ

- 1) De Trin., IV, I, 3; IV, XVI, 23; VII, III, 5; XIV, XII, 16; XIV, XV, 21.
- 2) Inst. I, 2.1; OSⅢ, S.34を参照。
- 3) Inst. I 15.4; OSⅢ, S.179を参照。
- 4) モルトマンは、次のように述べている。「栄光の神の国において、人間は究極的に、三位一体の神の永遠の命の中に完全に取込まれて、——古代の教会の言葉にあるように——神になる (*θεωσις*)」(J., Moltmann, Trinität und Reich Gottes, 1986, S.230)。モルトマンは、「*θεωσις*」の出典を記していないが、Ed. by G.



W.H.LAMPE, A PATRISTIC GREEK LEXICON, OXFORD, 1961,の当該項目を参照。例えば、ナジアンゾスのグリゴリオスは、次のように用いる。「…神との交わりを保とうとする者は誰でも、…三位一体において理解される一体性を通して神になる…」(ORATIO,21.2.)。

カルヴァンがこうした思想を受け継いだのだとすると、カルヴァンとナジアンゾスのグリゴリオスを、アウグスティヌス以上に結び付けるトーランスの見解も十分納得のいくことがわかる。